江戸小咄

駒田信二

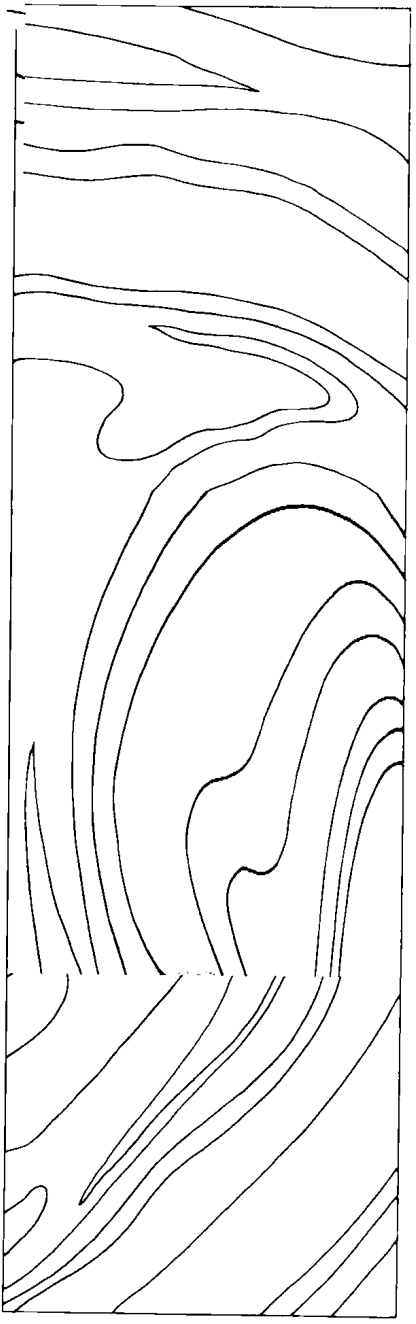
古典を読む——19

岩波書店

古典を読む——19

戸小咄

駒田信二



岩波書店

駒田信二

1914年三重県に生まれる
作家
『脱出』(鎌倉文庫),『島』(筑摩書房),『対の思想』(勁草書房)など．訳書に『水滸伝』(平凡社，講談社),『棠陰比事』(平凡社，岩波書店)ほか

江戸小咄

1985年2月19日　第1刷発行 ©
1985年4月1日　第2刷発行

定価 1800円

著　者　駒田信二

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-004469-9

目　次

中国笑話と江戸小咄
——序にかえて——　3
武士は食わねど高楊子　99
論語読みの論語知らず　117
芋の煮えたも御存知ない　157
泥棒せぬは氏神ばかり　193

医者の薬も匙加減
あとがき
235

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

江戸小咄

中国笑話と江戸小咄

——序にかえて——

明の李卓吾(一五二七—一六〇二)が編んだといわれている『山中一夕話』に、次のような話がある。

ある貧書生、饅頭を食べたいが金がない。そこで、ある日町で、饅頭を売っている店の前へ行き大声で叫んでぶっ倒れた。饅頭屋がおどろいてわけをたずねると、書生は、

「饅頭がこわいのだ」

という。饅頭屋は、

「こわいことがあるものか」

といい、饅頭を百個あまり並べた部屋の中へ書生をとじ込めて、外から様子をうかが

っていた。しかし、なんの物音もきこえてこないので、不安になって戸をあけてみると、書生は次から次へと手づかみに饅頭をむさぼり食っていて、もう半分くらいしか残っていなかった。

「どうしたんだ」

というと、書生は、

「もう饅頭はこわくなくなった」

という。饅頭屋がはじめてだまされたことに気づき、怒って、

「こんどは何がこわいか」

とどなりつけると、書生のいうには、

「お茶が二、三杯こわい」

この話は、同じく明の馮夢竜（一五七四―一六四五）の『笑府』にも見える。松枝茂夫氏の訳文（岩波文庫『全訳笑府』下）を借りる。（以下『笑府』の訳文はすべて『全訳笑府』に従う）

貧乏な男、腹がへってたまらぬので、町の饅頭屋の前を通りかかり、わざと大きな声

をあげてぶっ倒れる。饅頭屋の主人おどろいてわけをきくと、
「わたしは生まれつき饅頭が怖いんです」
という。そこで主人、空き部屋に数十個の饅頭を入れて、その中に男を閉じこめ、大いに困らせて笑いものにしてやろうと考えた。ところが大分たってもひっそりしているので、戸を開けてみると、半分以上も食ってしまっていた。そこでこれを詰ると、
「どうしてか知りませんが、急に怖くなくなりました」
との答え。主人怒って、
「ではほかに怖いものはないのか」というと、
「ほかにございませぬが、この上は茶が二、三杯怖うございます」

『落噺気のくすり』(安永八年・一七七九)には、これが次のように語りなおされている。

四、五人集まつて居る所へ、痩せた色の悪い男が片息になつて、がた〳〵とふるへて来て、
「あとから饅頭売りが参りますが、私はあの饅頭がどうも怖しくてなりませぬ。どこ

ぞへ隠して下され」

といへば、物置へかくしておいて、いたづらに右の饅頭を買つて、盆へ杉形(すぎなり)に積みあげ、物置の内へ入(いれ)て、戸をぴつしやり建てゝ押へて居るに、久しくすぎても音も沙汰もなし。

「もし怖(こわ)がつて死にはせぬか」

と明けてみれば、饅頭は残らず食つて、口なめずりをして居るゆへ、

「手前はあまり怖がつたから、おどしに入れたが、そう食つてしまつたのは、どこがこわいのだ」

といへば、

「アイ、この上は茶が二、三ばい怖ふござる」

落語「饅頭こわい」で広く知られている話だが、原話が中国にあるということには気づかない人が多いであろう。

*

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ある道士、親王府の屋敷跡を通り、亡霊に迷わされたところを、さいわい通りがかりの人に助けられて帰った。道士、

「あなたさまにお助けいただき、まことにかたじけのうござる。ここに魔よけ札を持ち合わせておりますから、せめてお礼にこれを進ぜましょう」

『笑府』に見える話である。これが大田南畝の『うぐひす笛』(天明頃・一七八一―八八)では、次のように語りなおされる。

近所の山伏、狐に化かされ、田のくろにて馬糞を食ひ居けるを、つれ返りて介抱しければ、やう〳〵正気つきけり。山伏、皆の者に向ひ、

「やれ〳〵、おかげで助かりました。お礼に魔よけの札を上げませう」

なお、清の石成金の『笑得好』には、『笑府』と同じこの話のあとに、次のような付け加えがある。

ある人が、
「魔よけ札があるのに、どうして自分で救わなかったのです」
ときくと、道士はいった。
「お札は、人を救うものであって、自分を救うものではありません」

*

老人夫婦が向いあって日向(ひなた)ぼっこをしていた。そのうちに婆さんがおかしな気になってきて、爺さんを引っぱってうながしたが、爺さんの物は寒さのためにちぢかんでしまったまま、いっこうに立ちあがらない。すると、婆さんがいった。
「出して、日にあててみましょう。ぬくもってきたらきっと立ちますよ」
「そうだな」
二人はズボンをぬいで、いっしょに日にあてた。しばらくすると婆さんが、
「わたしはもう、十分にぬくもってきましたよ。さあ、早く早く」
といったが、爺さんは、
「わしのはまだぬくもらんよ」

という。

「いっしょに乾(ほ)しているのに、どうしてこうもぬくもり方がちがうのでしょうかねえ」

と婆さんがいうと、爺さんのいうには、

「おまえのは開いて乾しているが、わしは丸ごとで乾しているのだからな。丸乾しは開き乾しのような具合にはいかないよ」

これは清の游戯(ゆうぎ)主人の『笑林広記』にある話である。この老人夫婦の話が、『さしまくら』(安永二年・一七七三)では次のように、百姓夫婦の話になる。

百姓夫婦、野良へ出て、昼ごろ、退屈して休む中に、嚊(かかあ)が内股が見えると、俄に味な気になり、すぐに畠中で一幕。

さて、仕舞ふたが、拭くものがないので、

「嚊、どふしよう」

「仰のけになつて天道干(てんとうぼし)にしませう」

「成程それがよい」
と二人ながら仰のけに成つて干し付る。
嚊はそのまま仕事にかかる故、
「もう干したか」
と問へば、嚊がいふよう、
「ととのは丸干だから干やうが遅い。わしのがは割干だから早く干し申した」
みごとな換骨奪胎ぶりといってよかろう。

*

中国で最初に編まれた笑話集は、後漢の邯鄲淳（一三二―二二〇頃）の『笑林』である。邯鄲淳は後漢末の学者で、魏の武帝（曹操）に召されて厚遇され、文帝（曹丕）のときには博士・給事中（博士は教学を司る官、給事中は「加官」で宮中の奏事を司る官）に任ぜられた。そのとき彼は九十歳を越えていたという。この『笑林』の原典は伝わらず、唐の欧陽詢等の撰になる『藝文類聚』、宋の李昉等の撰になる『太平御覧』、同じく李昉等の『太平広記』に引か

れている二十話あまりが残っているだけである。

初めて笑話集が編まれたということは、文芸の中から笑話が独立したということを意味する。なぜ独立したのかというと、それは、笑話が文芸からいわば閉め出されてしまったからである。そのいきさつを略記しておこう。

秦の始皇帝が統一国家を樹立したのは紀元前二二一年だが、それ以前の時代を先秦時代という。その先秦時代のいわゆる「諸子」の書のうち、『孟子』『荘子』『列子』『韓非子』などには、数多くの笑話が使われている。それらの笑話からは多くの警句的な成語が生れている。たとえば「助長」という言葉は『孟子』公孫丑篇の、苗の生長を助けようとして枯らしてしまった男の話から、「矛盾」という言葉は『韓非子』難篇の矛と盾とを売る男の話から出たのである。

宋の国のある男、苗がなかなか生長しないのを気に病んで、ある日、一本々々引き伸ばし、疲れはてて帰ってきた。そして家の者に、

「今日はくたびれたよ。苗の生長を助けてきたのでね」

といった。息子がそれをきいて畑へ行ってみると、苗はすっかり枯れてしまっていた。

楚の男が盾と矛を売っていた。

盾を手に取っていうには、

「この盾の岩乗なことといったら、どんなものでもこれを突きとおすことはできない」

また、矛を手に取っていうには、

「この矛の鋭いことといったら、どんなものでも突きとおせないものはない」

それを見ていた者がいった。

「それじゃ、おまえのその矛でおまえのその盾を突いたら、いったいどういうことになるのだね」

（『韓非子』）

なお、『笑府』に次のような話があるので挙げておく。二話のうち、前者は「助長」の、後者は「矛盾」の話の換骨奪胎であろう。

（『孟子』）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com